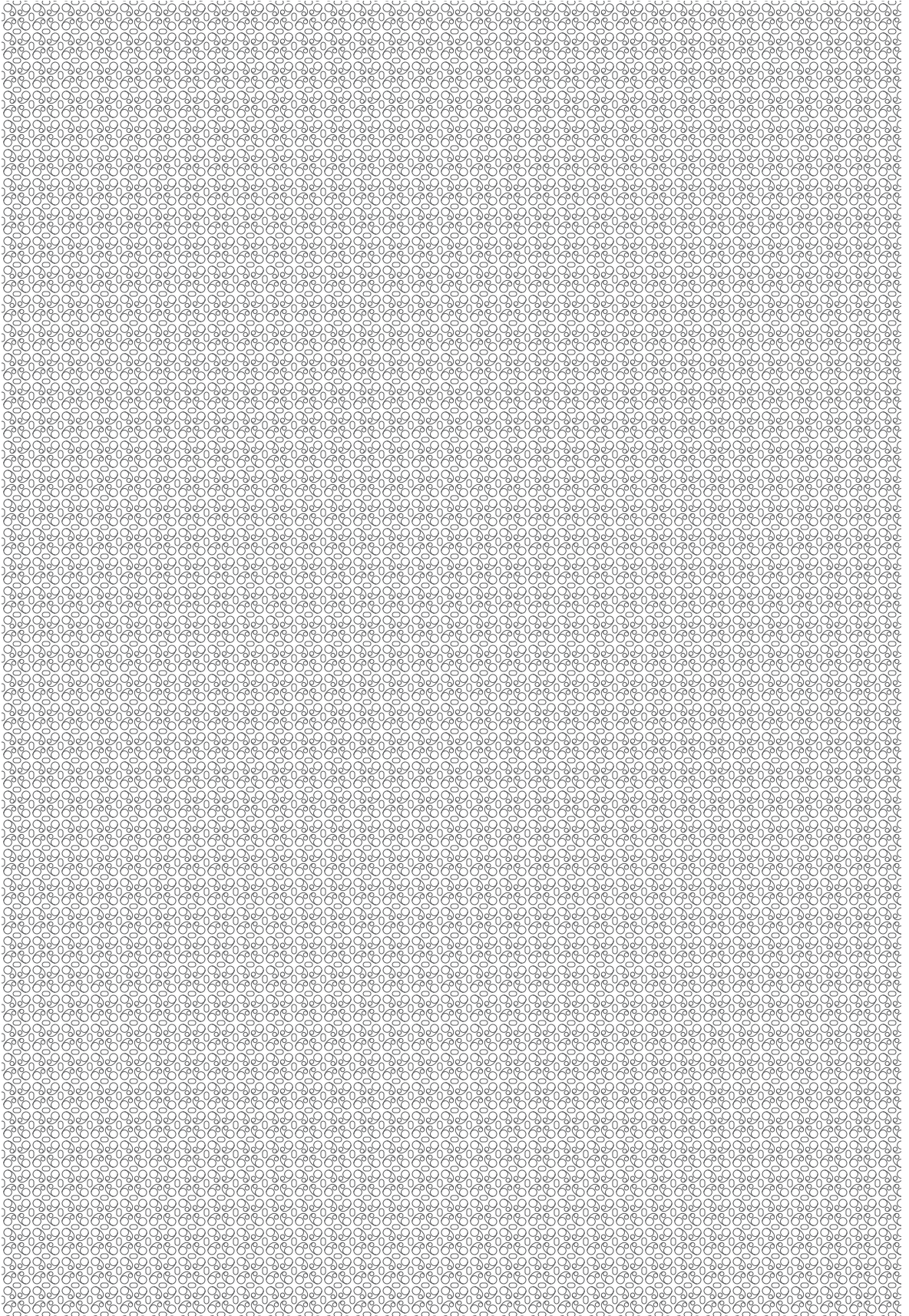


2026年度入学試験問題

国語

(試験時間 13:15～14:15 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。
2. 解答は、必ず解答欄の枠内に記入もしくはマークしてください。解答欄以外への記入およびマークはすべて無効となります。特に、記述解答用紙の採点欄に解答を記入しないよう、注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、一度マークした箇所を修正する場合、しっかりと消してください。消し残りがあると、解答が無効となることがあります。また、消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入・マークしてください。未記入や記入・マークミスなどがあつた場合は、当該科目の解答は無効になります。
6. 満点が100点となる配点表示になっていますが、国文学専攻（学部別選抜英語外部試験利用方式を除く）の満点は150点となります。



— 次の文章は、遠藤知巳「メディア的「現実」の多重生成、その現在形——クイズ形式からの観察」の一部である。これを読んで、後の問に答えなさい。(50点)

クイズ番組では通常、番組をコントロールする者(司会者や審判)が問いを出す側に回り、一人ないし複数の解答者が、一定時間内にそれへの解答を試みる。この経過が、何らかのかたちで、解答者間の順位を確定したり、一定の基準に照らした個々のプレーヤーの評価を与えることになる。つまりクイズ番組は、①特定の対象に関する知を賭金かけ金とした、②勝敗を伴うゲームとして成立している。まず最初に、クイズ的な知の形式がいかなるものなのかを検討してみよう。

本来、⁽¹⁾クイズ番組で交わされる問いと答こたえの交換は、視聴者にとってはどうでもよいものではなく、むしろ、晴れがましい舞台上上がる出場者にとっては、どうでもよい問いにうまく答えられればお金がもらえたりする大勝負の時なのだが、お金をもらえるわけではない視聴者には、それすらどうでもよいことだ。では、画面の向こうで繰り返られる問い—答の交換の現場を傍観することが、いかにして娯楽でありうるのか。

おそらく問い—答は、何らかの「興味深い(interesting)」知の連関を形成する(ことが期待されている)のであろう。それは直接的な利害関心をもたない視聴者にとっても、知ることにそれなりの快が伴うような、あるいは、何か得をした気分になれるような知識である。この「興味深さ」の領域を、簡単に特定することができるように思えるかもしれない。たとえば、問い—答の安定した関係を保証するために、いくつかの条件が排除されている。標準的なクイズ形式では、一つの問いは、必ず一つの答と対応しており、しかもその連関は十分に可視的でなくてはならない。社会の内部には、答の存在しない問いや複数の答がありうる問いがいくらかでも存在するが、そうした問いの領域は、当然のことながら避けられる。また、答が一つしかなくとも、多くの人にとって「興味深い」ものでない問いも、社会にはやはり大量に存在する。「私の昨日の夕食は何だったでしょう?」「次のなかで、社会学者タルコット・パインソンの著書はどれ?」など。あまりに私的な領域に属することがらや、ごく一部の人々によってしか知られていない事象は、クイズの対象になりにくい。「3+5はいくつ?」のごとき問いも、あまりに自明で

あるために「興味深い」ものではないだろう。

だがこうした輪郭は、あくまで外からのごく粗大な近似にとどまる。「興味深い」知の内容は、明らかに時間とともに移り変わっていく。「興味深さ」が社会的に共有されている知のある種の状態であることはたしかだろうが、共有されたその内容を問うてもあまり意味はない。各時点での雑多で恣意的な知の集積としてしか描けないからである。

考えてみればそれは、マス・メディアそのものに似ている。

日々生起する出来事を、社会的有意性をもった「ニュース」や「情報」へと加工し、人々に流しつづける。個々の時点において、「ニュースである／ないもの」「情報になりうる／なりえないもの」の区分はつねに働いているが、その区分の基準はメディア外部に客観的根拠をもちえない。⁽²⁾マス・メディアによる報道は、事件の重大性とそれに対する暫定的判断の、二重の短期性によって条件づけられているがゆえに、社会状態に対して反省的／超越的に観察するような視点にもとづく記述が、原理上つねに失調しつづける。なるほど、報道すべきニュースの選択の時点から、進行中の事態の俯瞰の試み（経過の「整理」や背景の「解説」）に至るまで、反省的／俯瞰的視点が恒常的であれば離散的なかたちでヨウセイされている。けれども、そうした視点は、あくまで偶発的な出来事と事件的に、かつ事件に後続するかたちで生成される。そして、そのような「客観的」な視点⁽³⁾が、出来事と事件の推移にしたがって、連続的に変更されるものであることは、経験的にもよく知られているところであろう。「客観報道」は、もとよりメディアが自らに対して抱く幻想にすぎない。なぜあの出来事ではなくてこの出来事が報道されなくてはならないのか、なぜ出来事をその他の角度からではなくて、この角度から報道しなくてはならないのか——マス・メディアにつきまとうことになるこれらの疑念は、マス・メディアという装置の夾雑物（きょうざつぶつ）⁽⁴⁾ではなくて、むしろその作動のなかに深く埋め込まれている。

逆にいえば、だからこそ「客観報道」の自己幻想が引き寄せられることにもなるのだろう。誤報や情報操作は、メディアという言説装置の、本来あるべからざる誤作動というよりも、むしろその構成要因のひとつである。その意味ではたしかに組織の問題であり、それゆえ、本質的な意味では「ゼセイ」⁽⁵⁾することはできないのだが、まさにそれがメディアの「欠陥」や「危機」と

して批判にさらされつづけることで、社会に対するメタ言説の領域との曖昧な接合が繰り返される。「欠陥」や「危機」の意味論が、メディアの反省機能を偽装するのである。⁽⁶⁾メディア批判をもっとも愛好する者がメディア自身であることも、何ら不思議ではない。「事後」を安心して宣言できることが可能にする、文字通り事件の外からの俯瞰や反省の視点を挿入することによって、出来事の推移に付随した視点の連続的な変形という事態を代補するという振る舞いが、反復されることになるのである。「事後からの検証」というこの意味論もまた、たしかにメディア・システムの一部ではあるのだが。

マス・メディアの存在する社会空間では、局所的出来事に対する全域的な知（それが「情報」である）⁽⁷⁾が、その根拠を曖昧にしたまま流通する。人はこの根拠の不在にどこかで慣れていなくてはならないし、出来事／報道の連続的な変形のさまを受け入れなくてはならない。というか、むしろ、出来事の推移（に対する人々の注目度）にしたがってかたちを変えていくニュースの連鎖それ自体が、連鎖していくニュースの事実的な根拠として機能する。ルーマン流に表現すれば、「マス・メディアシステム」がその都度自己準拠的に区分を産出していくことで自らを再生産しているということもできよう。

そのようにして、メディアによって「情報」がつきつきと生産され、一連の連鎖を形成していく。情報に着目する社会理論は、その単調な増大過程やその裏面としての情報爆発の危機を強調するが、マス・メディアの言説空間は、ただ単にますます大量の情報を蓄積していくのではない。「新しい」情報の連続的産出は、旧情報が後続の情報に押し出されるようにして、つきつきと忘却／削除されていくことよって可能になっている。ただし、忘却／削除された情報は、何らかの意味づけが与えられれば——典型的には現在の情報との対比によって——、再び想起され、現在の「ニュース」となることが可能である（「あの人は今」「五年前のあの悲惨な事件は記憶に新しいところですが……」）。こうした獲得／忘却のリズムに乗りつつ情報をフロー化して流していく。あるいは自らが情報のフローのなかで漂流しながら、人々は、かつて「知って」いたがとうに「忘れた」はずの情報がある時点で回帰するかもしれないことを、計算に入れておかねばならないのだ。

出来事／報道の連鎖は、同時に、⁽⁹⁾特定の時点において社会が知っている（と思っている）ことからの外部領域を発見することによる刺激の創出と、そのことによる、まさにその領域自体の既知化とが形成する、際限のない過程として成立している。その

「外部」は、ごく一部の人間だけが知っている／いた局所的現象として、すでに社会の内部に抱え込まれていたのだが、解決すべき困難な「問題」として社会に開示されることで、興奮に満ちた関心を惹起する。そして、繰り返し語られることで次第に飽きられていき、やがては忘却される。事件Ⅱ出来事は、不意打ちとして「外から」社会を襲うがゆえに、それに関する情報が欲望されるが、刺激を「情報」へと転換し、既知化していくことで、平板化していくことも運命づけられているのである。

強いショック作用を与える（ことが期待されている）それらの事件Ⅱ出来事は、もともと解決困難であるからこそ頻繁に「問題」化される。地震や台風といった自然災害の報道にわれわれがあれほど惹きつけられるのも、もつとも純粋な外部性の形態として、いわば安心してみていられる（！）スペクタクルだからだ。自然の突発的な暴威に真に対応する／先回りすることができないことを誰もが知っているからこそ、「自然の力が人間文明の思い上がりに警告を發した」というクリーシェが繰り返される。自然原因は、それ以上遡って問うことが無意味であるがゆえに、被災者にとっては悲惨な状況が、解く必要のない純粋な「問題」として享受される。同情と興奮の対象であるその生々しい状況や「被害の爪痕」に、人々は夢中になれるのである。地域住民が、その後の復旧作業や生活基盤の再構築の、長くうんざりするような「人間的」過程を担うころには、世間の目はとうに他の何かに移ってしまっている。

それに対し、さまざまなスキャンダルや社会制度がはらむ矛盾など、社会の内部で発見される「社会問題」は、異なる複数の利害関心が対立することで構成されている。全員が一致している状況は「問題」たりえないのだから。そのどれかの観点に依りて報道すれば——好むと好まざるとにかかわらず、また報道関係者の個人的な倫理観とは関係なく、最初の「告発」、問題の「発見」は、必ずそのようにして行われる——、十分刺激的たりうるのである。次いで、別の立場からの異議申し立てが生じると、今度はそちらに憑依する。こうした過程の複雑化と引き延ばしとによって、当初の興奮は醒めていき、報道の一サイクルは終了するわけだが、その都度特定の視点に寄り添う報道の単振動的変動が、「問題」を、その解決の困難さとともに、社会的な水準へと登記する機能を担っているのである。

それゆえ、「ニュース」や「情報」が流れつづける世界のなかで、クイズが娯楽の一様式になるのは何ら不思議ではない。

もちろん、ニュース報道がクイズ（番組）と完全に同じことをしているわけではない。両者は本来まったく出自が異なるし、機能もちがう。ニュース報道が未知の刺激を既知の情報へと転換していくといっても、それでも初発の報道がなされる時点では、ほとんどの人間にとってそれは本当に「未知」のものであり、メディアによる言及だけが、それへと至る回路である。また、全貌をなかなか現さない事件⇨出来事をめぐって、報告視点や解釈の複数性が——つまり出来事の本源的な未決定性が——、露呈する瞬間をもつことにもなる。だが、進行中の事件に対して過小であることがもたらす報告／解釈の複数性は、そのような限定された観察が連鎖し、事態の「全貌」を構成していくことで、つまり、まさに複数の報告の連鎖の効果によって、単一化されていく、あるいはそのことがつねに期待されている（「事後」の視点の召喚が繰り返されるのはそのためでもあるだろう）。そしてまた、出来事の未決定性と接していた観察の複数性は、緊張感なく横並びする既知の解釈図式の複数性という、情報雑誌的な解説／解釈の空間へとずれこんでいくことになる。⁽¹²⁾

ニュース報道がクイズ形式に隣接することになるのは、おそらくこの地点においてである。クイズとは、既知であるはずの知を、(13)に配列し「問題」にすることで、いわば一瞬だけ未知化する手続きだが、結局のところ、種々雑多な既存の「情報」の空間のかたちだけは疑わないことで成立している。クイズが対象としうる「興味深い」知の領域をあらかじめ数え上げることなどできないのはそのためだ。つまりクイズ的知の形式は、メディアが行っている、未知の連続的産出と連続的なその既知化の果てに位置づけられると同時に、メディア的な情報の様態を、メディア内部に折り返すかたちで象徴的に再生産している。クイズとは、すでに既知であるはずのものを、やはり既知であったと事後的に確認する儀式のごときものとして、メディア的な言説空間に付着しているのである。あたかも、マス・メディア自身の戯画化された形態であるかのように、あるいは、メディアとともに漂流する現代人の「情報」への身体的感受性をつねに励起させておくための、必須の準備体操であるかのように。クイズは、あの報道の連鎖の事後的な抜けガラのごときものとして、——いわば「事後」の「事後」として——メディアの意味空間に回帰する。⁽¹⁴⁾

注 タルコット・パーソンズ……アメリカの社会学者（一九〇二～一九七九）。 夾雑物……ある物の中にまじりこんでい

る余計な物。 ルーマン……ドイツの社会学者（一九二七～一九九八）。 クリーシェ……決まり文句。

単振動的……ここでは複数の視点の間を行き来する様子を指す。

〔問一〕 傍線(4)(5)(14)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で二画一画明確に書くこと）

〔問二〕 傍線(1)「クイズ番組で交わされる問いと答の交換」とあるが、それに関する説明として適当でないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A クイズでは社会的に共有された知が問いの対象とされるが、その知は体系的でない。
- B クイズでは基本的に問いと答えが一对一で対応しており、問いと答えの関係は明確である。
- C クイズ番組における問いの内容は、出場者にも視聴者にも必然的な関係を持たない。
- D クイズ番組で行われる問いと答えの交換を傍観するだけでは、娯楽として成立しない。
- E クイズ番組の問いには、限られた範囲の人々の関心に関わる対象は取り上げられにくい。

〔問三〕 傍線(2)「マス・メディアによる報道は、事件の重大性とそれに対する暫定的判断の、二重の短期性によって条件づけられている」とあるが、「事件の重大性」に関する「短期性」とは何か。その内容の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A マス・メディアは重大な出来事を持続的に観察するものだが、その出来事の収束が見えてくると、報道の対象は次へと移るということ。

B マス・メディアは人々にとって刺激的と思われる出来事を報道するものだが、その出来事が広く知られ飽きられてくると、報道の価値は失われるということ。

C マス・メディアは複雑な出来事を分かりやすく伝えるものだが、その出来事が単純な情報に加工されると、報道の役割は終わるということ。

D マス・メディアは出来事が重大であるということを過度に強調するものだが、その出来事の真相が見えてくると、報道の姿勢は冷静になってくるということ。

E マス・メディアは報道すべき出来事か否かを一時的に判断して報道するものだが、その出来事が推移すると、報道の比重も変化するということ。

〔問四〕 傍線(3)(7)(8)(10)(12)のうち「 」の用法が他と異なるものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A (3) B (7) C (8) D (10) E (12)

〔問五〕 傍線(6)「メディア批判をもっとも愛好する者がメディア自身であることも、何ら不思議ではない」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A マス・メディアは社会の人々の立場に立って情報を発信しようと努めるが、マス・メディアにはしばしば人々からの不信が向けられるので、人々の不信の視点を代弁するためにはメディア自身に対する批判を行うことが有効であるから。
- B マス・メディアにはニュースの速報性を競う側面があるので、他の報道に先を越されるといふ事態も生じてしまうが、事件報道に対する超越的な視点を挿入することで、他の誤報を指摘し自らの報道の正しさを示すことができるから。
- C マス・メディアは即時性によって条件づけられているため、社会状態を俯瞰する観点を持ち得ず誤報の可能性が常につきまとうので、客観的な報道を行うためにはマス・メディア自身が自らのあり方を批判し続ける必要があるから。
- D マス・メディアという装置は客観的な情報を人々に伝えるという役割を持つが、出来事が進行中である限り俯瞰的な視点に立つことはできず、自らを俯瞰的に批判する視点を偽装することでしか客観性を保証することができないから。
- E マス・メディアで報道されるニュースの選択基準には超越的な観点に基づく根拠がないが、自らが客観的であるという幻想を持つマス・メディアにとって、自己批判することは自らの客観性を自分自身の手で保証する手段になるから。

〔問六〕 傍線(9)「特定の時点において社会が知っている(と思っている)ことからの外部領域を発見することによる刺激の創出と、そのことによる、まさにその領域自体の既知化」とあるが、「刺激の創出」と「既知化」に関する説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 自然原因の問題では、状況の過酷さによって一時的に人々に刺激を与えるが、自然の暴威に対処することは困難であるという見方が反復されることで人々の興奮はさめていく。社会問題では、個別のスキヤンダルが報道されることで人々に刺激を与えるが、社会的な問題として一般化されていくにしたがって当初の興奮はさめていく。

B 自然原因の問題では、社会の外から到来した災厄として人々の関心を集めるが、長い復旧過程が始まる頃には人々の関心は別の対象に移る。社会問題では、複数の立場が対立する状況で、ある観点に即することで問題が発見され人々の関心を引き、複数の立場を行き来しながら問題が引き延ばされ、社会的に問題が認知されつつ人々の関心が離れる。

C 自然原因の問題では、自然以外に原因を追及できないので安心して人々に享受されるが、人々の協力が必要な状況になると人々は目を背けるようになる。社会問題では、誰かの観点に憑依することで報道が始まり、報道当初の観点とは別の観点が現れることで人々に刺激を与えるが、多様な観点が社会に広く知られると報道のサイクルは終わる。

D 自然原因の問題では、人間に対する自然の警告として意味づけられることで普遍的な問題として人々に受け取られ、個々人の問題には触れないまま報道は終息する。社会問題では、社会内部に利害の対立が発見されることで問題が形成されるが、様々な立場からの意見が出され全体的な水準で物事が見えるようになると報道の役割は終わる。

E 自然原因の問題では、当事者にとっては深刻な問題であるにもかかわらず、人間の力の及ばない問題として社会に共有され、他人事のまま既知化される。社会問題では、報道関係者の告発によって社会制度の矛盾が明らかとなり人々に刺激を与えるが、反対の立場からの意見が生じたのち、解決に向けて議論が深められながら既知化していく。

〔問七〕 傍線(11)「ニュース」や「情報」が流れつづける世界のなかで、クイズが娯楽の一樣式になるのは何ら不思議ではない」

とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A クイズにおける知の形式は、既に社会に共有されている情報を再確認するような知のあり方だが、それは未知の出来事を既知の情報へと転換するメディアのあり方と、既知の情報を流通させようとする点で重なるから。

B クイズにおける知の形式は、多くの人が興味を持つような情報を次々に作り出すような知のあり方だが、それは新鮮な刺激を連続的に産出するメディアのあり方と、人々に刺激を与えようとする点で重なるから。

C クイズにおける知の形式は、未知の問題を既知化するようなメディア的な知のあり方と近接しているので、マス・メディアとともに生きる現代人にとって、情報と適切に向き合う姿勢を育む役割を担っているから。

D クイズにおける知の形式は、答えがなかったり複数であったりする問題を排除して成り立っており、出来事の未決定性や解釈の複数性が残ってしまうメディアの知を、より簡素な情報にする役割を担っているから。

E クイズにおける知の形式は、過去の報告や解釈によって蓄積された情報から問いを生成するものだが、それは出来事の進行にしたがって報道するマス・メディアのあり方と、事後的な知を産出している点で重なるから。

〔問八〕 空欄(13)に入る本文中の語としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 恣意的 B 超越的 C 偶発的 D 連続的 E 刺激的

〔問九〕 この文章の内容に合致するものとしてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ニュース報道とクイズ番組とは、成立の事情もメディアとしての機能も異なるが、出来事についての未知の面に触れ得る点や、出来事には本来的に決定しきれない部分が残っていることを意識する点で、両者は隣接している。
- B メディア的な情報空間では、一部の人々にしか関係がない問題でも深刻であれば積極的に情報化され、それらの人々に向けて流通されるが、人々に刺激を与えるか否かとは無関係に社会状態を理解しようとする知はあまり流通されない。
- C マス・メディアが存在する社会で生きる人は、社会に流通している情報がなぜそのように共有すべきなのかについての客観的な根拠がないことに慣れたり、獲得されては忘却されていく情報の流れのなかを漂ったりしなくてはならない。
- D クイズ番組の出場者は、出題に対して一定時間内に解答することが求められるが、こうした能力を鍛えることは、情報の流動性が高まるメディア的な世界のなかで、情報に敏感に反応し得る感受性を高めることにつながる。
- E マス・メディアは、終わりの見えない出来事に対して事後の立場を捏造ねつぞうすることで全体像を作り上げたり、全貌が知り得ない出来事を既知であるかのように偽装したりするので、情報の客観性が求められる現代では役目を終えつつある。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

かかる程に、三位中将殿、土御門の源氏の左大臣殿の、御むすめ二所、嫡妻腹にいみじくかしづきたてまつりて、后がねと思しきこえたまふを、いかなるたよりにか、この三位殿この姫君をいかでと心深く思ひきこえたまひて、気色だちきこえたまひけり。

されど大臣、「あなものの狂ほし。ことのほかや。誰か、ただ今さやうに口わき黄ばみたるぬしたち、出だし入れては見んとする」とて、ゆめに聞こしめし入れぬを、母上、例の女に似たまはず、いと心かしこくかどしくおはして、「などてか、ただこの君を婿にて見ざらん。時々物見などに出て見るに、この君ただならず見ゆる君なり。ただ我に任せたまへれかし。このこと悪しうやありける」ときこえたまへど、殿、すべてあべい事にもあらずと思いたり。

この大臣は、腹々に男君達いとあまたさまさまにておはしけり。女君達もおはすべし。この御腹には、女君二所・男三人なんおはしける。弁や少将などにておはせし、法師になりたまひにけり。またおはするも、世の中をいとはかなきものに思して、ともすればあくがれたまふを、いとうしろめたきことに思されけり。

かくてこの母上、この三位殿の御事を心づきに思して、ただいそぎにいそがせたまふを、殿は心もゆかず思いたれど、ただ今の帝いと若うおはします、東宮もまたさやうにおはしませば、内、東宮と思しかくべきにもあらず。またさべい人などの、ものものしう思すさまなるもただ今おはせず。閑院の大將などこそは、北の方年老いたまひて、ありなしにてきこえなどすめれど、かの枇杷の北の方などの煩はしくて、この母北の方聞こしめし入れず。ただこの三位殿をいそぎたちたまひて婿どりたまひつ。そのほどのありさま、いとわざとがましくやむごとなくもてなしきこえたまへれば、摂政殿、「位などまだいと浅きが、かたはらいたきこと。いかにせん」と思したり。

(『栄花物語』)

注 三位中将殿……藤原道長。 左大臣殿……源雅信。 母上……藤原穆子。 雅信の正妻。 帝……一条天皇。

閑院の大将……左大将藤原朝光。 枇杷の北の方……源延光の妻。 延光死後、朝光と再婚。

摂政殿……藤原兼家。 道長の父。

〔問一〕 傍線(1)「たてまつり」、(5)「たまへ」の敬意の対象は誰か。もつとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- A 三位中将殿 B 左大臣殿 C 御むすめ D 母上 E 帝

〔問二〕 傍線(2)(4)(8)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(2) 「気色だちきこえたまひけり」

- A 姫君への恋心をほのめかし申し上げられた
B 姫君にひそかに恋文をお送り申し上げられた
C 姫君との結婚の意向を大臣にお伝え申し上げた
D 姫君をお慕いになる気持ちが大いにも伝わった

(4) 「かどかどしくおはして」

- A 人を人とも思わぬご性格であって
B 折り目正しい人柄であられて
C 頑固な方でいらっしゃって
D 才気がおありになって

(8) 「ものものしう思すさまなる」

- A 立派な人物であると思われるような方
B 振る舞いが魅力的に感じられるような方
C 思慮深くて相談相手にしたくなるような方
D 学識があって近寄りがたく思われるような方

〔問三〕 傍線(3)「ゆめに聞こしめし入れぬ」とあるが、左大臣殿がそのようにした理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 自分が大事にしているむすめのところに、密かに通ってくるような浮気な男がまったく許せなかったから。
- B いくらむすめの結婚相手がいらないからといって、母親が勝手に婚を選ぶのは常識にはずれることだから。
- C たとえ家柄がよくても、容姿や才能に劣る若者を、むすめの結婚相手として認めたくはなかったから。
- D むすめの結婚相手が、よりにもよって政敵の摂政のむすこになろうとは、想定外のできごとだったから。
- E むすめを帝や東宮の后にしたいと考えていたので、官位の低い若者などは結婚相手として論外だったから。

〔問四〕 傍線(6)「いとうしろめたきことに思されけり」とあるが、左大臣殿の心境の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 正妻のむすこたちが出家して僧侶になったり政治から心が離れているので、家の先行きをたいへん不安に思っている。
- B あちこちにたくさんの子どもがいるのに、正妻のむすこたちだけが家から離れてしまったことをとても気にしている。
- C 妻の助言を聞き入れなかったことが原因で、むすこたちが家を出てしまったことに、心中では気がとがめている。
- D むすめたちのことはとても大事に育てていたのに、むすこたちの世話をせず出家させてしまったことを後悔している。
- E 自分が左大臣であるにもかかわらず正妻のむすこたちが出世できないことを、たいへん世間体が悪いと感じている。

〔問五〕 傍線(7)「心づきに思して」とあるが、母上は三位中将殿のことをどのように評価していたのか。それを表す言葉を本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

〔問六〕 傍線(9)「かたはらいたきこと」とあるが、摂政殿は三位中将殿の結婚についてどのように思っていたのか。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 母上の思い違いから中将殿があまりに高貴な者としてもてなされていることにいたたまれなく感じている。
- B 左大臣殿の反対を押し切って母上が中将殿をむすめの婿にしたことを傍らで見ているはらはらしている。
- C 中将殿はまだ官位も低いのに、心をつくした丁重なもてなしで婿入りしたことを心苦しく思っている。
- D 中将殿と左大臣殿のむすめの結婚が、不自然に盛大であったことに疑問を感じて、善後策を考えている。
- E 左大臣殿のむすめとの結婚はもともと考えられないことなのに、婿入りした中将殿を苦々しく思っている。

三 次の文章は、宋の文人蘇軾そしやくが作った七言古詩の冒頭部である。これを読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある) (20点)

人生識ルハ字憂患始ム

姓名粗ほほ記セバ可シ以テ休ヤム

何ナニ用ユ草書誇ランヤ神速ナルヲ

開ケバ卷ヲ儻な悦きやうトシテム令ニ人ヲシテ

(3)

我嘗好ミ之ヲ每つねニ自ラ笑フ

君有レ此病何能瘳ム

自言其中有ニ至樂一

適フコトニ意レ無シト異ナルコト逍遙遊せうやうゆうニ

〔石蒼舒醉墨堂〕詩

注 儻な……失意のさま。 逍遙遊……俗世を超越し、束縛の無い境地に心を遊ばせること。

石蒼舒……蘇軾の友人。草書が得意であった。「醉墨堂」はその書齋。

〔問一〕 傍線(1)の文意としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 名前を記入しおわったら、休んでもかまわない。
- B 名前を書けさえすれば、それで十分である。
- C 名前を書いてから、あとで取り消すこともできる。
- D 名前を忘れてしまったので、どうにもならない。
- E 名前しか書けないのでは、役に立たない。

〔問二〕 傍線(2)と同様の意味を表すものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 何為
- B 何其
- C 何況
- D 何処
- E 何足

〔問三〕 空欄(3)を補うのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 悦
- B 愁
- C 嘆
- D 悲
- E 誘

〔問四〕 傍線(4)の書き下し文としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 君に此の病ひ有り、何をか能く瘳よやさん。
- B 君に此の病ひ有り、何ぞ能く瘳えん。
- C 君に此れ有り、病ひ何ぞ能く瘳えん。
- D 君に此れ有り、何の病ひか能く瘳えん。
- E 君に此の病ひ有らば、何をか能く瘳やさん。

〔問五〕 本文に関する説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 草書の名品からうかがわれる筆運びはまさしく神速であり、驚嘆を禁じ得ない。
- B 蘇軾は、不治の病に冒されている石蒼舒が穏やかな余生を送ることを願っている。
- C 草書はあせて書いてはだめであり、筆をゆつくり運んだ方が上手に書ける。
- D 蘇軾は、草書を愛好する友人の石蒼舒を同病相憐れむ気持ちで見ている。
- E 収集家にとって、草書の名品を手に入れる喜びは理想郷に遊ぶのに等しい。

